明治大学大学院文学研究科　　発行日　2019年3月31日

複眼的日本古代学研究の人材育成プログラム

＜日本古代学教育・研究センター＞明治大学大学院文学研究科史学専攻・日本文学専攻

ニューズレター　第25号

◆巻頭言

明治大学文学部教授・総括責任者　石川日出志

小説の中に突如現れた人物

自分がなりわいとする考古学の土台を確かめたくて、日本考古学の歴史（学史）を調べている。日本における近代的考古学は1877（明治10）年のE. S. モールスの大森貝塚調査に始まる。しかし、日本では、江戸時代に有職故実の一環として考古学的な活動があり、明治期になって欧米から導入された近代科学としての考古学との間に小さからぬ軋轢が生じた。その周辺についていくつか焦点を定めて情報を集めているが、なかなか進まない。しかし、意外なところで宝の原石のような情報に出くわすことがある。

ふだん小説はあまり手にしないが、城山三郎や吉村昭らの作品はかなり好み親しんでいる。10年ほど前、幕末の尾張藩の命運を追った城山三郎の作品『冬の派閥』（新潮文庫）の中ほどまで読み進んだとき、田中不二麿という５文字に釘付けになった。

不二麿は、岩倉遣欧使節団に文部理事官として随行したのち明治13年まで文部行政を主導した官僚で、明治12年の教育令制定が最大の功績とされる。しかし、考古学上でも忘れてはならない人物である。明治10年にモールスが大森貝塚を発掘した際の出土品を天覧に供する手続きを進めた不二麿が作成した文書「大森村古物発見ノ概記」の冒頭で考古学の語を用いたのが、日本でarchaeologyを考古学と訳した最初である。不二麿がなぜarchaeologyを考古学と訳したのか、その背景はどのようなものか、ずっと気になっていた。ただ、詳しい情報はなかなか入手できないでいたが、『冬の派閥』で突如不二麿が現れた。巻末の参考文献でこの作品の主たる情報源が西尾豊作『子爵田中不二麿伝』（1934年）だと知り、直ちに入手した。あいにく私が知りたい情報は乏しかったが、これが糸口となって周辺資料も集めた結果、1876年のフィラデルフィア万国博覧会で渡米していることを知り、心の中で小躍りした。

モールスは、1877（明治10）年に腕足類研究のために来日した。紹介状を携えて文部省顧問のD. モルレーに面会すると、この年に開設された東京大学では、たまたま理学部生物学科の動物学の教授職が空席であったことから、教授に採用されたことになっている。しかし、これは偶然にすぎるのではないか。不二麿が、大学開設の前年に渡米している！　当時、文部卿が不在（明治7～11年）だったために、不二麿が文部省のトップを務めていた。東京開成学校と東京医学校を合併して総合大学・東京大学を設立する当事者であり、動物学教授の候補者がいないことを知らないはずはない。不二麿の1876年の渡米にはモルレーも同行し、教育事情や博物館情報を収集している。モールスと接点があったとまでは言えないが、東京大学で動物学を担うにふさわしい人物の紹介をフィラデルフィアで依頼したと考えるのが自然であろう。モールスの来日は、東京大学理学部動物学教授の候補者としてであったのではなかろうか。

なお、昨年読んだ加藤秀俊『社会学―わたしと世間―』（中公新書）では、ミシガン大学で学び、東京大学開設時に教授、のちに文部大臣となった外山正一がモールスを連れてきたことになっている。ほかにも同種の言があるが、もうひと押ししなければと思っている。

ちなみに、田中不二麿の名は、井上ひさし『国語元年』（中公文庫版：69頁）などにも登場する。

目次：

フィールドワーク
ＵＳＣプログラム …… 2
中国プログラム …… 3
南西日本プログラム …… 5
大阪大学との交流会 …… 6
国際学術研究会　交響する古代Ⅸ …… 7

◆フィールドワーク

◇南カリフォルニア大学プログラム

実施日　　：2018年11月1日(木)～7日(水)　5泊7日
参加人数：学生3名　引率者4名　計7名
実施場所：南カリフォルニア大学
〈フィールドワーク概要〉
11月1日　　：成田空港発、ロサンゼルス国際空港着
11月2～3日：USCにおいて学術交流
11月4日　　：ロサンゼルス自然史博物館、ハリウッド博物館
11月5日　　：ラ・ブレア・タールピット公園・博物館、ロサンゼルスカウンティ美術館（LACMA）
11月6～7日：ロサンゼルス国際空港発、成田空港着

◇参加記

博士後期課程2年　里舘　翔大

今年度の南カリフォルニア大学プログラムは11月1日～7日の日程で行なわれた。日本からの参加者は考古学・日本史学・日本文学・文芸メディアの院生3名と教員4名である。1日に現地に入り、2日・3日にUSCとの学術交流会が行なわれ、4日～5日には現地の博物館・公園（発掘現場）・美術館を見学し、6日の朝に出発し、7日の夕方に帰国した。

学術交流会では、2日間で4分野12名の発表があった。私の発表は2日目にあり、「古代東アジアの戸籍制度の継受（The *Koseki* System,Diachronic Diffusion and Adoption）」というテーマで発表した。古代東アジア圏内、特に中国・朝鮮半島・日本での戸籍制度の継受を軸にして、現存している古代日本の最古の戸籍（大宝2年（702）御野（美濃）・筑前・豊前・豊後国戸籍）を検討すると、同じ年代の戸籍であっても、御野国戸籍は日本オリジナルのレイアウトが採用され、筑前・豊前・豊後国戸籍は東アジア圏内で継受されてきたレイアウトを採用している。その目的と意義はなぜなのか、という点を発表した。

発表に対しては、USCの方からも、古代日本の「戸」とはどのようなイメージか、現在の「家」とは異なるのか、というご質問をいただいた。「戸」と「家」の問題は、現在でも考古学・文献史学間で論争が絶えないテーマであるが、ご質問から、海外においても強く認識されたテーマであることを実感した。アメリカには日本のような戸籍制度が存在しないこともテーマが強く認識された背景にあると思う。

USCの方々の発表では、御伽草子の一種である『厳島の本地』を題材に寺社縁起と聖地空間の関係を明らかにする発表、御膳の故実を記し、日本最古の料理書とされる『厨事類記』の検討から平安時代後期の食事を復原する発表、古代日本の律令体制がどのようにして地方に伝播していったのかという「中央―地方」に関する発表、前近代日本史研究の成果を国際レベルでどのように発信していくか、研究用語の適切な英訳はどのようにすべきかを考えた発表、藤原頼長著『台記』の記事から、頼長がどのような漢籍を読んできて、その漢籍をどのように英訳すべきかという発表など多岐に渡っていた。海外における日本研究に直接触れられ、かつ、この場ではじめて知ったこともあり大変有意義な時間を過ごせた。

懇親会の席でも、ジョー・ピジョー先生を含め、多くの方たちから、貴重なお話を聞くことができた。また、広大な敷地を持つUSC内を見学させてもらった。著名な映画監督であるスティーヴン・スピルバーグやジョージ・ルーカスの出身校であることから、映画分野が人気であり、実際に見学中にも学生たちが自作映画を撮っている場面に出くわした。

学術交流会以外の場でも多くの刺激を得ることができた。4日にはUSCの近くにあるロサンゼルス自然史博物館に訪れた。恐竜の化石の展示がメインではあるが、アメリカの自然史、具体的にはどういった生物が生きていたか・生きているかという現代の展示（等身大の哺乳類（バッファロー）や魚（リュウグウノツカイなど）の人形・標本）も大迫力であった。また、メディア史に触れるためにハリウッドとその博物館にも訪れた。非常に多くの人で賑わい、ハリウッドがどのように発展していったのかを肌で直接感じることができた。

5日には世界最大のアスファルト湖があるラ・ブレア・タールピット公園・博物館、ロサンゼルスカウンティ美術館（LACMA）に訪れた。底なし沼である天然のアスファルトに包まれると簡単に抜け出せずに窒息死、あるいは餓死した氷河期の古代生物の化石が発掘されている。その化石は細部まで残っており、歯はもちろんのこと、たとえば、トンボは羽まで化石化されている。公園内では、これまでの発掘現場や、現在の発掘現場もみられた。非常に興味深い公園であった。

以上の学術交流会を通しては海外の研究者が持つ日本研究への視点・方法・認識の共通・相違性を学び、巡見を通しては迫力がある展示や自然、人々の生活を肌で直接感じることができた。自分の今後の人生にプラスに働く貴重な機会をいただいたことに関係者の方々に御礼申し上げる。

◇中国プログラム

実施日　　：2018年11月1日（木）～6日（火）　5泊6日
参加人数：学生1名　引率者3名　計4名
実施場所：中国（南京・揚州・如東）

＜フィールド調査行程＞

11月1日：成田空港発・南京空港着
11月2日：南京大学で学術交流会開催　　侵華日軍南京大学大屠殺遇難同胞紀念館・南京博物院を見学
11月3日：揚州市内の揚州博物館・甘泉漢墓跡・漢廣陵王墓博物館を見学
11月4日：揚州市内大明寺，如東市国清寺跡および出土遺物，現・国清寺を見学
11月5日：如東から南京に移動　　南京城中華門を見学
11月6日：南京空港発・成田空港着

◇参加記

博士前期課程2年　関根　史比古

本年度の大学院GP中国プログラムは2018年11月1日から11月6日にかけて行われた。

私にとって中国への渡航は初めての経験である。主目的である学術交流や遺跡・博物館見学のほかに、南京市郊外の空港からホテル、南京から揚州、揚州から如東、如東から南京への移動では、現代中国の都市部や農村部の実情を直接観察することができた。各地で摂った食事も食文化の違いを実感するよい機会であった。

初日の大半は日本から南京への移動に費やされたが、2日目は午前と夕方に南京大学での学術交流を行い、午後は虐殺紀念館・南京博物院を見学した。南京大学での発表は大学院生1名と教員2名の発表である。実際のプログラムとしては、9:00～12:30（コメント・質疑を含む）加藤友康先生「出土史料からみた日本古代の情報伝達」、関根史比古「縄文時代から弥生時代への土器群構造の変容―東日本の関東地域を中心に―」、18:30～20:30石川日出志先生「中国璽印考古学の提唱」である。

海外で行われる学術交流での発表は初めての経験であり、直前までは緊張していたが、発表が始まると集中することができた。発表を終えた後、いくつかのコメントと質問をいただいた。中でも一番印象深かったのは土器に非実用的な文様装飾を施すことは儀礼的な意味があるのかという質問であった。日本で研究している私にとっては土器に文様装飾が施されるのは当たり前のことと考えていたため、かなり新鮮な質問であった。

虐殺記念館の見学は刺激的であった。日本では数少ない戦争による犠牲をテーマにした博物館であり、犠牲者が葬られた遺構の検出状況、日本軍の行為、展示解説における中華民国の扱い方などに注目しつつ展示を見学した。南京博物院の見学時間は短かったが、研究対象時期に併行する時期である新石器時代の遺物を特に注目して見た。

3日目は揚州市へと移動し、揚州博物館と廣陵王陵博物館の見学を行った。廣陵王陵博物館は王陵を郊外の発掘地から揚州城址近くに移築して保存した博物館であり、前漢代の墓葬の壮大さを実感するとともに、遺跡の保存・活用の仕方に注目した。

4日目は揚州市内の大明寺・鑑真記念堂を見学したあと、如東市へと移動した。如東市では、遣唐使の一員として円仁が渡唐した際に、最初に滞在した地として注目される国清寺跡の発掘現場の見学を行った。中国における寺跡の基壇や柱基礎の構築法、発掘調査の方法を知る良い機会となった。

5日目は如東市から南京市内へと高速道路で約300km移動したのち、明代の城門である南京城中華門の見学を行った。都城の城壁は日本にはなく、大陸文化の力強さを感じるとともに、城壁の構築材である塼に文字が刻印されており生産状況を知る重要な手がかりになっていることが興味深かった。南京城壁遺構の構造を活かして、城壁中の倉庫のような部分に写真や解説パネル展示を設ける点などに関心を持った。

今回のプログラムを通して学んだことは、東アジアの中の中国・日本との関係である。弥生文化は稲作農耕に大きな特徴があり、中国の新石器時代と通じるものがあるため、研究を進める中で広く中国との関係についても学び、考察していこうと考える。

最後に、本プログラムでは引率の先生方ならびに南京大学の先生・学生の皆さんには大変お世話になりました。末筆ながら感謝申し上げます。

江蘇省如東市国清寺跡にて

◇南西日本プログラム

実施日　：2018年12月4日（火）～6日（木）
参加者　：引率教員2名、院生7名　計9名
実施場所：大分県・福岡県
〈フィールドワーク調査日程概要〉
12月4日：羽田空港発 - 大分空港着。安国寺遺跡（国東市）、真玉大塚古墳（豊後高田市）、宇佐神宮・大分県立歴史博物館（宇佐市）、長者屋敷官衙遺跡（中津市）見学。
12月5日：豊前国府跡・豊前国分寺跡・甲塚古墳（みやこ町）、みやこ町歴史民俗博物館、福原長者原官衙遺跡（行橋市）、行橋市歴史資料館、石塚山古墳・苅田町歴史資料館、北九州市自然史・歴史博物館、宗像大社・神宝館、宗像市郷土文化交流館、宮地嶽神社・宮地嶽古墳（福津市）、福津市資料館　見学。
12月6日：大野城跡・水城跡・筑前国分寺跡・国分松本遺跡・大宰府跡・太宰府天満宮・九州国立博物館（太宰府市等）、春日市奴国の丘歴史資料館、福岡市埋蔵文化財センター・板付遺跡（福岡市）見学。
福岡空港発 - 羽田空港着。

◇参加記

博士前期課程２年　箕浦　絢

2018年12月4日（火）から6日（木）までの3日間、大分県・福岡県で南西日本プログラムが実施された。2泊3日で大分・福岡両県の30か所近い遺跡・博物館・神社を見学する強行軍であった。縄文・弥生時代から古代律令期までの遺跡と、博物館、神社をまわり、内容が多岐にわたるため、各時代、分野ごとに紹介する。

弥生・古墳時代にかけての遺跡として安国寺遺跡、板付遺跡を踏査した。安国寺遺跡は国東半島に立地する弥生時代末から古墳時代初頭にかけての集落遺跡である。低湿地帯であるため鍬や田下駄などの木製農具や建築部材が出土している。板付遺跡は弥生時代早・前期の集落遺跡である。1951年からの調査で弥生文化の成立が解明され、1978年からの調査で縄文／弥生時代区分論争を巻き起こした遺跡である。

両遺跡とも国史跡に指定され、現在は遺跡公園として整備されており、復元家屋や併設資料館で実際の遺物の見学が可能である。

古墳時代の遺跡としては真玉大塚古墳、川部・高森古墳群、甲塚古墳、石塚山古墳、宮地嶽古墳を踏査した。真玉大塚古墳は国東半島北部に立地し、5世紀後半に築造された大分県下最大級の前方後円墳であるが、豊後高田市指定史跡となっているものの現状は畑脇の林の中にあり、後円部は大きく掘削されて痛々しい姿であった。

川部・高森古墳群は6基の前方後円墳と約120基の円墳や周溝墓から構成される、3世紀から6世紀まで連綿と続いた古墳群である。その中でも赤塚古墳は3世紀末に築造された九州最古級の前方後円墳で、副葬品の三角縁神獣鏡からヤマトとの関係がうかがえる古墳である。大分県立歴史博物館が併設され、資料見学が可能である。

甲塚古墳は6世紀後半に築造された九州最大級の方墳である。巨石を使用した横穴式石室は玄室で天井までの高さが4.6mもある。現状は古墳公園となっており、墳丘構造や石室内部を見学できるのが嬉しい。

石塚山古墳は九州最古にして最大の畿内型前方後円墳である。3世紀後半に築造されたと考えられ、石室から鉄製の武器・武具・農具や、玉類、銅鏡などが出土している。古墳時代前期の北部九州において本古墳以外に武器と武具を併せ持つ古墳は現在のところなく、また墳形や規模、銅鏡の質や量から見ても、北部九州の中でも傑出した古墳である。本古墳の資料は併設の資料館で一部見学できる。

宮地嶽古墳は宮地嶽神社の境内に立地する、7世紀築造の円墳である。玄界灘沖合いにある相島から運ばれたと考えられる玄武岩の巨石を使用した横穴式石室を有する。副葬品は金銅製の馬具や頭椎大刀、緑瑠璃板などが出土しており、国宝に指定され九州国立博物館に展示されている。

古代の遺跡としては長者屋敷官衙遺跡、豊前国府跡、豊前国分寺跡、福原長者原官衙遺跡、大野城跡、水城跡、筑前国分寺跡、国分松本遺跡、大宰府跡を見学した。官衙遺跡や国府跡、国分寺跡などは現状整備が進んでおり、建物の位置や規模を確認することができる。

大野城は古代の山城である。大宰府跡の北側背後に聳える大城山に立地しており、アップダウンの激しい地形に石塁が構築されている。晴れていれば基肄城や筑後平野の古代山城を確認することも可能だろうが、今回は小雨降るなかの行軍で視認できなかった。

神社は宇佐神宮、宗像大社、太宰府天満宮を参拝した。宇佐神宮は全国八幡宮の総本宮であり、御祭神は一之御殿・八幡大神（応神天皇）、二之御殿・比売大神、三之御殿・神功皇后で、創建は725年である。東隣にはかつて弥勒神宮寺が建立されていた。宗像大社の御祭神は田心姫神、湍津姫神、市杵島姫神の三女神である。宗像大社は別名道主貴といい、この宗像の地や沖ノ島は朝鮮半島や中国との交易の窓口となった重要な土地である。神宝館や隣の海の道むなかた館では銅鏡や金銅製馬具、玉類など、沖ノ島の祭祀遺物を見学することができる。太宰府天満宮は菅原道真の御神霊を祀り、905年に創建された。天神さまを祀る神社の総本宮とされ、学問・至誠の神社として知られている。

本プログラムでは初めと終りに弥生時代遺跡を踏査し、九州最古級や最大級の古墳、豊前・筑前の国府・国分寺跡や、太宰府など官衙遺跡をめぐった。各時代の重要な遺跡をめぐり、北九州地域での動向や畿内、朝鮮との関係をうかがい知ることができた。また神社にも参拝し、各神社の由緒にふれ、当時や現在の神仏との関わり方を考えることができた。文献史学と考古学の教員・院生が参加し、様々な場所でそれぞれの意見を言い合うことで、新たな発見が非常に多く得られたプログラムであった。

末筆ではありますが、この度このような機会を与えてくださった先生方、関係者の方々に心より感謝を申し上げます。

国特別史跡大宰府都府楼跡にて

◇大阪大学・京都府立大学・関西大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム

実施日　：2019年1月6日（日）
実施場所：大阪大学豊中キャンパス　文法経済学部本館　大会議室
〈概要〉

1. 石川日出志（明治大・教授【考古学】）「金印研究―真贋論争から璽印考古学へ―」
2. 木村理（大阪大・博士後期課程【考古学】）「埴輪にみられる技術系統と労働力動員に関する予察
―古墳時代中期後葉を対象に―」
3. 鈴木七奈（関西大・博士前期課程【考古学】）「終末期古墳を構成する諸要素―横口式石槨墳を中心に―」
4. 桜田真理絵（明治大・博士後期課程【日本史】）「遣唐使の傔従について」
5. 増成一倫（大阪大・博士後期課程【日本史】）「新任国司への給粮と「公廨」
―公廨稲成立以前を中心として―」
6. 里舘翔大（明治大・博士後期課程【日本史】）「平安時代の鞠智城周辺」
7. 安東峻（大阪大・博士後期課程【日本史】）「『日本後紀』弘仁二年十月甲戌条の再検討」
8. 岩元亮祐　（京都府立大・博士前期課程【考古学】）「中世在地土器からみる都市の消費
―13世紀における鍋釜形土器を中心に」
9. 吉村武彦（明治大・名誉教授【日本史】）「はるくさ木簡・歌木簡と『記・紀』歌謡・旧辞論」

今年度は1月6日の1日だけであったが、前記のように充実した報告と質疑応答が行われた。しかしながら、今回、大学院GPの助成基準に満ちなかったために、明治大学関係者として参加した教員6名（名誉教授1名含む）と大学院生2名はいずれも私費にて参加することになった。そのため、大学院生による参加記ではなく、次年度への継続の意も込めてである実施記録のみを掲示することにした。
参加者は35名と、例年とほぼ同数を集め、参加四大学にとって年始の重要な学術的な交流行事として根付いていることを実感できると申し添えておきたい。
（中村友一）

◆国際学術研究会　「交響する古代Ⅸ」

実施日　：2019年1月12日（土）・13日（日）
実施場所：明治大学グルーバルフロント1階　グローバルホール

2019年1月12・13両日，恒例の国際学術研究会＜交響する古代Ⅸ＞が、駿河台キャンパスのグローバルホールにおいて開催された。
研究と教育を連接した取り組み進めてきており、例年大学院生のセッションも設けてきたが、文科省の私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の最終年度に当たることから，今回は大学院生のセッションを設けることができなかった。

◆1月12日(土曜)　10:00-17:30	◆1月13日(日曜)　10:00-17:30
石川日出志氏（明治大学） 「複眼的日本古代学研究ー金印をめぐる実践ー」	山﨑健司氏（明治大学） 「萬葉集仙覚本データベースの概要と可能性」
吉村武彦氏（明治大学名誉教授） 「歌木簡と旧辞論の再構築」	ローベルト・ヴィットカンプ氏（関西大学） 「古事記は翻訳できるかー英・独訳における音仮名表記の扱い」
ヨーゼフ･クライナー氏（ドイツ・ボン大学名誉教授） 「岡正雄ー20世紀における日本の民族学の形成と展開」	木下綾子氏(聖学院大学) 「『和漢朗詠集』における菅原道真の詩と本文系統」
小笠原好彦氏（滋賀大学名誉教授） 「聖武天皇が造営した紫香楽宮と甲賀宮」	沈慶昊氏（韓国・高麗大学校） 「高麗・李朝の石碑墓碑文について」
荒木志伸氏（山形大学） 「政庁機能の再検討ー古代城柵官衙遺跡を中心にー」	日向一雅氏（明治大学名誉教授） 「文学論の時代ー10世紀の詩論・和歌論・物語論」
志村佳名子氏（信州大学） 「古代・中世除目書研究の可能性 ー三条西家の除目書を中心としてー」	井上亘氏（常葉大学） 「日本最初の書物：聖徳太子『法華義疏』の成立」
中井真木氏（明治大学） 「下襲(したがさね)のひろがりー院政期の故実を中心に」	加藤友康氏（明治大学大学院） 「文化資源の研究資源化と統合型検索システムの開発」

明治大学　〒101-8301　東京都千代田区神田駿河台1-1
日本古代学教育・研究センター:猿楽町第二校舎３階　TEL:03-3296-4492
E-MAIL　jkodaken@meiji.ac.jp ホームページ　http:www.meiji.ac.jp/dai_in/arts-letters/jkodaken